

## ■評 建築

## 中東の日建設計



ドバイのワンザビール。真ん中で横倒しになったタワーのように見えるのがザ・リンク ©Hufton+Crow



タダウル・タワーのエントランス。鏡面仕上げにより虚実が重なる情報空間のデザイン (アート: 山本浩二)  
©Production Alef 二つとも由田建設提供

大大学院教授  
(五十嵐太郎、建築史家・東北)

## 高精度で独創的な造形

21世紀に入り、中東の都市では、アイコン建築と呼ばれるユニークな形態の高層ビルが増えている。これらを海外の大手事務所が手がける状況において、

日建設計が国際コンペで勝ちとり、近年完成した二つのプロジェクトを見学した。アラブ首長国連邦のドバイのワンザビール（2023年）と、次回万博の開催地であるサウジアラビアの

首都リヤドのタダウル・タワー（22年）である。

ワンザビールは敷地が高架の道路で分断されていたことを逆手にとって、それぞれにタワー（305mのオフィス棟と235mのレジデンス棟）を配し、上空100mでザ・リンクと呼ばれる水平のボリュームでつなぐ。その長さは230mに及び、いわば横倒しになったタワーの

ように見え、しかも60mを超える片持梁で大きく張りだす。

ザ・リンクはレストランなどの商業施設があり、屋上にはアーチを備えている。いずれもシンプルな直方体だが、ロシア構成主義をほのつかせるダイナミックな組み合わせによって、頂部に変わった形態や装飾を加えることなく、ランドマーク的なインパクトをもたらした。

一方、タダウル・タワーは多

面体ではあるが、大きな面を設定し、全体として中層の長方形に近い平面から上層の五角形へと、フロアが変化していく。また斜めの壁や柱、磨かれた金属や石が特徴的であり、鏡面仕上げのエントランスは風景と照明を映し込むことで、CGで描かれたように見える。なお、上層の中心部には自然光が差し込む垂直の吹き抜けをもつ。

二つのプロジェクトは中東において精度の高いデザインを実現する。同時に、アイコン建築に対するほかとは違うアイデアを提示した。

またワンザビールは空港から中心街に入る手前に位置するため、都市のゲートのようであり、ビルが密集していないおかげで、遠くからでもさまざまな角度で視界に入る。

タダウル・タワーは、ドバイの成功を意識して着手した経済特区に登場した。リヤドは華麗な都市だが、このエリアだけは敷地割りが変則的であり、イスラム建築の幾何学を想起させる多面体がデザインコードになっている。ゆえに、多くのビルは細かく面を分節し、装飾的に処理した。

Giornale Mainichi Giovedì 13 marzo 2025

**TADAWUL**

Borsa centrale dell'Arabia Saudita, Riyadh

Progetto architettonico: Takamori YAMAZAKI | NIKKEN LTD

Pittura: Koji Yamamoto, *Pino Nero*, 2022, 6.0 x 20.0m, schermo LED